

禪の友
ZENnoTomo

I
2023





ご本山だより 大本山永平寺【法話発表会】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



無事にまた一つ年を重ねた永平寺。行持^{ぎょうじ}の日々が心新たに勤められてゆきます。

永平寺では毎年一月末に「法話発表会」が開かれます。新年を迎え、雲水たちの常日頃の修行の深まりがここで大きく試されるのです。法話とは仏法を伝えるということ。そして仏法とは、お釈迦さまを始めとするお祖師さま方がお説きになったみ教えです。そのみ教えを正しく伝える布教、伝道は私たち僧侶の責務と言えます。

山内に二十程ある各寮舎から一名ずつが発表者となり、各々準備をしてきた十分間の法話を行います。普段は指導を受ける立場、法話を聞く立場の雲水たちですが、この日は他の雲水を聴衆としてその前に立ち、自らが話す機会を与えられるのです。緊張もある中である者はしどろもどろになりながら、ある者は言葉足らずながら自信

をもって、またある者は冷静に落ち着いてと、それぞれがそれぞれの言葉でもって「法」を伝えてゆきます。

法話をするにあたっては經典や祖録の中のおししを「法」として十分に参究しますが、その示すところの理解を自らの身に引き当て経験に照らし合わせる中で、自身の至らなさ、拙さが丸裸にされてゆきます。しかしながらそこに大きな気づきが生まれ、「法」の光に照らし出された自己がそのまま人々への良き例えとなるのです。

「法話は人なり」。法話はその人柄、そして人徳が自ずと現れると言われる、いかに日常の実践が大切であるかが問われるものです。「法」を説くにはまだまだ未熟な雲水たち。しかしその発表の中には心の琴線に触れるものもあるのです。この経験を胸に雲水たちは今一度自らを点検し、また一つ大きく成長してゆくでしょう。



ご本山だより 大本山總持寺【新年を迎えて】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



新しい年を迎え、世界平和と感染症
終息そして皆さま方のご多幸をお祈
り申し上げます。

「二日の計は朝にあり、一年の計は
元旦にあり」これは中国明代に憑應京
という学者が記した『月令広義』にあ
る「一日の計は晨にあり、一年の計は
春（元旦・元日・正月）」にありとい
う一文が由来となっています。

私たちは生きていく目標を持たな
ければちょうどハンドルのない自動
車のようになってしまう、挙句の果て
に溝に落ちてしまいます。

仏教ではこれを誓願と言います。大
般若経六〇〇巻の中程の『魔事品』に
「行あつて願なきものは菩薩の魔事な
り」という一説があります。どのよう
な仏菩薩でもこの誓願を必ず持つて
おられて、それを成し遂げるために精

進しておられるのです。もししつかり
とした目標がなく、行為行動だけあつ
てもそれは菩薩さまの偽物だと教え
ている言葉なのです。

私たちもこの清々しく迎えること
ができた元日の朝にそれぞれの誓願
（目標）を立て、それに向かって邁進
していこうではありませんか。

總持寺では年が変わる少し前に大
梵鐘の撞き初めが始まり、大祖堂での
石附禪師さま御親修の祝禱諷経・元朝
大祈禱が行われます。

初詣祈禱は五日まで行っております
ので、どうぞ御参詣をお願い致します。
新春の行事が終わると「冬安居」と
称される一〇〇日間の集中修行期間
が解制（終了）となり、冬安居を無事
に成し遂げた修行僧の安堵した姿が
印象的なのです。

選・坊城俊樹

始祖鳥も乗りたる風か鷹渡る

長野県 森山 昌子

評

始祖鳥とは二億年前の恐竜で鳥の祖先といわれている。その鳥がかつて乗ったであろう風に鷹たちが乗っているという空想。そして越冬のために南方へ渡って行く。始祖鳥はあまり飛べなかったようだが鷹渡るのをさぞかし憧憬の面持ちで見ているのだろう。

星流る山に山姥走らせて

島根県 金山 陽

評

伝説の山姥とは奥深い山に棲む女の怪物。それがこんな美しい星流れる夜に山を走っているのだ。恐ろしさと同時になんとも言えない美しさで寂寥感を感じる。思うに山姥とは走りながらそのまま流れて行く星になってしまふのではないだろうか。

◆ 起き抜けの跡を伝ひ来る秋意

岩手県 鈴木道昭

◆ 朝露に濡れてぶらんこ人を待つ

埼玉県 野原孝子

◆ 煤臭き土間の思い出火の恋し

群馬県 大淵 洋

◆ 天高し硬いが売りの煎餅屋

千葉県 長澤きよみ

◆ 訪ねれば地図なき道に木守り柿

兵庫県 内藤昭子

◆ 野路の秋ブツセの遠き空仰ぐ

島根県 藤江 堯

◆ 実石榴を的に磔を打つ童

東京都 鈴木英治

◆ 深秋や湯船にて聴く夜汽車の音

宮城県 高橋 静子

◆ 種採るや命こぼさぬやうに採る

愛知県 紅林 廣子

◆ 草原に牛の半眼小春風

鳥取県 眞山博充

選者吟

嫁が君夢に現はれ絢爛に

俊樹

作句小見

「嫁が君」とは正月三が日に出てくる鼠のことを言う。それが初夢に出てきたのである。しかもどこか絢爛なるものを纏いつつ。ふだんはあまり歓迎されない鼠なのだが、神仏のお慈悲としてせめて正月の夢の中くらいは着飾ってやりたいものである。

選・長澤 ちづ

暗渠の上の市場が撤去され半世紀の闇を
出でし川音

北海道 菅原 三江子

評 長く暗渠の上に在った市場が撤去されたこと
を、その下を流れる川に焦点を合わせて詠い、
着眼点が新鮮である。市場の移転先は何処に
などいろいろ思わせつつ、闇を出た川の音の
ように明るい未来も感じさせる。

茜さす山越えゆけば港町潮の香ただよう
妻のふるさと

石川県 千間 宏治

評 「茜さす」は枕詞として使われることもある
が、ここでは山越えののち、夕日の差ししかつ
たころの情景だろうか。しみじみとした情感
の漂う一首である。

◆ 両の手を合わせる祈り人のみが持つ敬虔な^{かたち}容と気付く

兵庫県 前田 あつ子

◆ 覚えある啼き声聞こえ空仰ぐ白鳥の群れV字の飛翔

秋田県 小松 紀子

◆ 桃一個かぶりつのが一番と朝市の人並べつつ言ひぬ

岐阜県 後藤 進

◆ 声変わりする前の^{あと}声後の声掛け合い響く少年野球

山口県 橋本 美知子

◆ カみてもペットボトルの蓋開かず五本の指をつくづく見つむ

静岡県 高尾 善五

◆ 朝焼けの映る厨に新米のごはん炊きみる湯気たちのぼる

岩手県 阿部 照子

◆ 受話器をあげて祭囃子の笛の音を浪速の友に聴かせやりたり

三重県 西村 廣視

◆ 生垣の上より花の面のぞかせてひとと高きコスモスの花

鳥取県 徳本 義則

◆ 滑舌を良くするために声高く経となうるを亡夫うれしむや

山口県 濱田 道子

◆ 君づけでわれに近づく白髪の喪服のせつ予クラスにいたいた

静岡県 末光 愛正

選者誌

サツプより降りて浜辺に立つ人の手には太刀魚
すらり陽に光る

ちづ

作歌小見

後藤さんの歌の豪快な桃の食べ方、如何にも美味しそう。
生産者の言葉が精彩を放ち、「一個」と「一番」のリズムの良さも弾
みを付けます。拙歌の「サツプ」は、サーフボードより横幅が広く
安定感があり立って漕ぐことのできるもの。